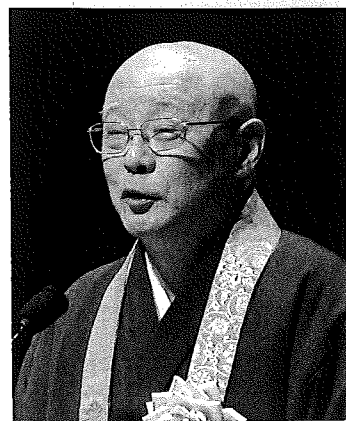


記念講演

「夢をかたちに一心豊かに」

中尊寺貫首

山田俊和



■昭和18年生まれ

東京都出身・大正大学・仏教学部卒業

■昭和59年

天台宗の修行階梯を経て、東京最勝寺（目黄不動）の住職のかたわら、天台宗参務総務部長・駒込学園常任理事・大正大学監事・天台宗海外事業団副理事長など歴任

■平成18年10月1日

天台宗東北大本山山中尊寺貫首にご就任。

中尊寺の山田でございます。

今日はこのロータリーの地区大会に大勢の皆様方がご参加されていらっしゃることに、誠に盛会でおめでたいことと思っております。

今日は、国際ロータリーのテーマになっている「夢をかたちに」ということで、私なりの「夢をかたちに」をお話させていただきたいと思っております。

今日、地区大会でお話させていただくことになりまして、国際ロータリーの本をいただきました。これを読んで勉強せよということかなと思ひまして、ちょっと初めの方だけですが、読ませていただきました。そこに「これかな!」と思ったことは、ロータリーの理念というものが書いてありました。確か2ページ目ぐらいじゃないかと思うんですが、その中に、「ロータリーは人道的な奉仕を行う人々の会」だと。それから「あらゆる職業において、道徳的水準を高めること」というように書かれています。また、世界における親善と平和の確立のために寄与することを目指すということが書いてございませ

た。これは我々が今の世の中で、最も心の中にきちっと留めておかなければならない理念です。又、言い直してみますとお釈迦様がお説きになられて、我々仏教徒が信条としている、心の豊かさを求め慈悲に充ちた温かい世界を造ろうという、そういう心と何ら変わるところがないと思ひました。

昔はロータリークラブの会員の方に会うと、何かみんなお金持ちで、地区でも重要な役職をされていて、私達みたいな下町の者には近付きがたいみたいな感じがしておりましたが、これを読ませていただいて「ああ、そうなんだ」と、申し訳ない話ですけれども、私達仏教徒と何ら変わることがないんだと思った次第であります。それは何故かと申しますと、「ガバナー月信」を読ませていただきますと、その奉仕活動の具体的なものとして「ポリオの撲滅・人間尊重・飢餓の追放・識字率の向上・貧困の救済・飲料水の供給・児童虐待の撲滅」というように、奉仕活動の内容を述べられております。

私達は天台宗という宗派に属してございまして、「一隅を照らす運動」というものを展開しておりますが、この活動内容の具体的なところでは何にも変わることがございませぬ。私も国際的な救援の「一隅を照らす運動」というものに、かなり長いこと携わってまいりましたので、カンボジア、タイ、ラオスなど発展途上国に救援に出掛けて、学校を建てたり、教科書を出版したり、そういうお手伝いも今日までさせていただいております。

現在も宗門でそういう運動が行われています。具体的な事において、実際は皆様と私共が行っている活動の内容は、そんなに違っているわけではないと感じたわけでございます。

■奥州の平和を希求した清衡公

ところで、今私がここにこうしてお招きを受けたということも、平泉の文化遺産を世界遺産に登録しようということで、国、県、市、町それぞれのところで、色々な方法をもって活動が続けられております。

残念なことに昨年落選いたしまして、「なんたることか」というふうに実は私は思っております。と言いますのも、中尊寺自体がその申請に関わっていることでもございませぬし、どこかに行ったらアピールが出来るというわけでもございませぬので、私達はただただ、実のところを申しますと静観をしているというような立場でございませぬ。些か私も誤解をうけまして、「駄目だったんですね。残念ですね」と。私が別にやったわけではないんですが、その当事者であるということで「そうなんです」と言うんですけども、「何か作成文章が間違っただけじゃないか」なんて言われますと、自分が作ったんじゃないんでどうも答えようがないという事でありませぬ。

中尊寺の世界遺産に登録されるもの、あるいは平泉の文化遺産として登録されるものというのは、このあと少しお話をさせていただきますが、藤原清衡公という方が中尊寺を建立した。これは前九年・後三年の合戦という、奥州を誰が治めるかということで身内同士が敵対して、血で血を洗う戦いを繰り返してその結果、清衡公が勝ち残って奥州一帯を治める押領使になったのです。

その時に、清衡公は色々とお考えになったんだと思いますね。それは何故か。普通でしたらその当時の奥州というこの辺り一帯は「産金」、金が採れた。世界で一番金が採れたらろうというくらい金が採れる。まずそういう地域であっ

た。北海道、青森等々、北の国から入ってくる海産物、あるいは弓矢に使う羽、毛皮とか、色々なものが都に運ばれて莫大な利益を得た。非常に豊かな所で白河の関以北、外ヶ浜までの約500キロ位の所は、外地というように当時は見られていたわけですが、そこを何とか帝のものにしよう、我々が治めようということで争いがあったわけです。ですから、金がたくさん採られてそれだけ豊かな財力があるわけですから、普通でしたら勝ち残ったんですから、武器をたくさん買い込んで砦を造って兵隊をたくさん養って、隙があったら外へ打って出て領地を広げて、来るものがあればやっつけて、自分の所にたくさんの利益を呼び込むということができたわけです。

じゃあ清衡公はそうするのかということをおもいました時に、ハタと気が付いたんじゃないかと思ひますね。それは戦争をすることによって、自分の父母も殺され妻も子も殺され、自分は相手の人間の命を奪い、異母弟の家衡を殺し、それで勝ち残った。後ろを向いたならば、喜んでくれる身内は一人もいなかったんですね。それで何としたことかと。恐らく清衡公という方は思われたんだと思います。そこで清衡公に会って色々お話をして仏教を伝えたという、自在房蓮光という方がいたわけです。この方がいわゆる天台宗の教え、法華経の教えというものを清衡公に伝えて、その教えに従って中尊寺を開かれる。

つまり、この世に生まれた者はみんな平等に生きる権利があつて、平等に幸せに暮らせる権利がある。そういうものを持ってみんな生まれてきている。敵と味方もなくこの地に在る者は、この地で故なくして命を失った者は、みんな浄土に導いてあげたい、そういう気持ちを持って中尊寺が開かれるわけです。ですから今の言葉で申しますれば、この奥州の平和とこの奥州に住んでいる人々の幸せとそれまでの間に命を失って迷っているであろう靈魂を、敵も味方もな

く私はみんな浄土に導きたいと言って中尊寺が開かれて、三代秀衡公は無量光院を開く。そういうことにつながっていくわけですね。ですから平泉の文化遺産と申しますのは、中尊寺に残っている金色堂・経蔵・そして毛越寺の浄土庭園、それから无量光院の跡等です。そういうものが世界遺産に登録されるものなのではありますが、本当のところ私どもが考えますのは、世界遺産として登録されるものは、平泉に100年間ではあるけれども、平和と幸福をもたらしたいいわゆる浄土の考え方。これがやはり世界遺産たるもの、平泉がそういうものだというように実は思っているわけでございます。この事を解っていくために、ちょっとお釈迦様の事などについても少しお話をさせていただきます。

お釈迦様という方は、皆様もご承知の通りだと思いますが、今から2500年ほど前に生まれて、正確には西暦前565年4月8日から486年2月15日まで80歳の生涯を送られた方で、インドの北の方のシャカ族の王子として生まれる。そして29歳で妻もあり、子どもあったのですが、王位を捨てて、出家の道を求められ、35歳で悟りを開かれて、それ以後インドの国々を歩かれて、自分の悟った世界をあらゆる所でお話をして過ごされるという生涯であります。

つまり、王位を捨ててまで出家をしなければならなかったその動機は何だったのか、ということを知っていただくことが、とても私は大切なことだと思います。

人生は成長するに従って色々ありますが、例えば好きな女性とうまく巡り会えた時などは人生バラ色だと思います。そして結婚して子供が生まれたら三重丸のバラ色ぐらになりますね。これが孫だったら五重丸ぐらになりますね。そういうことで、今皆様がおっしゃっているような夢のひとつが実現していくということです。

お釈迦様は、「四門出遊」という故事があるわけですが、お城の周りの四つの門から出て、いわゆる「生老病死」四苦をそこで見られる。

東の門から出ると老人を見る。西の門から出ると病人を見て、北の門から出た時に死人を見る。葬列を見る。人間というのはこの世に生まれた者は、「生老病死」という四つから逃れることは出来ない。この世に生まれた者は、平等にこの苦しみを背負わなければならないということ、まずお感じになるんですね。

そしてその次には八苦。四苦の他にあと四つあるんです。まず「愛別離苦」です。愛する者と必ず別れなければならない。生まれてくる時には一人、死んでいく時だって一人ですよ。一緒に行こうと言っても「まだまだ私はもうちょっと…」とみんな言いますよ。愛する者と誰でも別れなければならない。

その次は「怨憎会苦」。怨みがあって憎たらしくて絶対に会いたくないと思っている相手とも、どこかでなんかの関係で会わなければならない。そういう苦しみがある、人間には。

次は「求不得苦」というんです。求めるけれども得られない。あれが欲しいなあと思ったけれども、どうしても自分の手元には来ない。そういうものを求めても得られない苦しみ。

最後は、「五陰盛苦」あるいは「五陰盛苦」といいますけれども、これは人間が生まれてから成長を遂げて衰えていく、その一生の間にある身体的な、あるいは精神的な苦しみです。

それでこの「四苦八苦」というものは、人間が生まれた限り決して自分の思い通りにはならないというのが、お釈迦様の出家の動機です。この思い通りにならないことというのを、中国で苦しみの苦というふうに訳している。インドの「思い通りにならない」お釈迦様のおっしゃられたそのことを中国語に訳された時は、苦しみの「苦」という字で表した。だからお釈迦様は、人生は苦であるとまずお感じになられた。それが動機になって出家をされて修行することになった、というふうに私達は思っているわけになります。

■お釈迦様の四つの願いとは—

これは言葉を換えて言えば、お釈迦様が生まれた当時というのは、群雄割拠の時代です、インドのその時代は。常に強い国から攻められて命が奪われる、そういう中で、人間がどこの国の者も生活をしているという状態でございましたので、まず第一には、安全に平和にみんなが安心して暮らせることを願った。

つまり単純に言えば、平和と幸福を求めて、お釈迦様はご出家をされて修行ということになるのだと思っております。それでお釈迦様が修行する時に立てられた四つの願いごと、誓願があります。これは「四弘誓願」と仏教の方では申しまして、我々仏教徒の日々、毎日を生活する修行する上での大変重要なことになっているわけであります。

まず第一番目は、全ての人々を救うと言っているんです。これは皆様方ロータリアンの書いてあることと同じでしょう。奉仕をして困っている人を救う、自分以外のいろんな悩みや苦しみを持って生活している人々を、何らかの方法をもって救う。そういうように、まずは誓っているんですね。

二番目は、全ての煩惱を断とう、全ての迷い事を断とう。つまりこれは今言った全ての人を救おう、困っている人を助けようという時の、何か障害となるような事、煩惱・迷いというもの的一切なくそう、そういうことだと思えます。

三番目は全ての教えを学ぶ。これは世の中の心理です。世の中というのは、こうならなければならない。こうあって欲しい。こういうものがあってはならない。そういう正しい真理を私達は学ぼうということです。そしてその結果は、そういうものを通じて本当の意味での悟りを開く。これを全ての人達と一緒にしようというのが、お釈迦様のたてた四つの誓願であります。

つまり今言ったことの言葉を換えますと、仏様のいわゆる仏陀の悟りを開いた者の心であるということも言えるのだと、私は思っているわ

けであります。

そこで先程申しましたように中尊寺が開かれ、藤原清衡公・基衡公・秀衡公と受け継がれた藤原三代が中尊寺を開いた、あるいは平泉の町を切り拓いた、その心根が何かということではありますが、中尊寺というのは、藤原清衡公が創建される前に、「寺伝」お寺の言い伝えでは、慈覚大師円仁様が嘉祥3年（850年）、この時に東北地方を巡錫されて、山形の立石寺、青森の恐山、中尊寺、毛越寺、それから瑞巖寺、そういう東北の大寺を慈覚大師がお開きになられたということではありますが、その850年に平泉に「関山・弘台寿院」という名前を持って、慈覚大師が開かれたのが中尊寺の始まりだといわれております。

藤原清衡公という方は1056年から1128年、72年間のご生涯でございますけれども、その1126年に中尊寺を創建されたということでもあります。そのきっかけになっておりますのが、前九年の合戦というのが起きて、これが1051年から1062年まで、それから後三年の合戦というのが1085年から1087年まで起こるわけです。後三年の合戦というのが、1087年に終わってそこで東北地方に仏教を広めに来ていた比叡山延暦寺の聖僧、自在坊蓮光という方が、骨寺村にお住まいになっていらっしゃって、その方と巡り会う機会が生まれるわけです。

そこで、清衡公は仏教にふれる。そして自分達の奥州をいかにして幸せにするか、いかにして幸せで平和な国にするのかということに考えを至らした時に、これは何が一番素晴らしいのかといいましたら、二つのことが私は要素にあったと思うんです。一つは、攻められない為には天皇、法皇の御願寺になる。祈祷寺になれば、外から弓を引かれるということはないだろうということです。これは武将として考えるのには非常に政治的と申しますか、素晴らしい考え方だったと思います。もう一つは仏教、特に法華経から得られた素晴らしさです。それが、当時

流行していた末法思想、それに伴う浄土の思想、お地蔵様の思想、考え方、そういうものと一緒に中尊寺を開くという事に、だんだん傾いて行かれたんだと私は思います。中尊寺の創建に当たっては、落成式が1126年3月24日行われているんです。883年ぐらい前じゃないかと思うんですが…21年間かかって中尊寺の今の場所に金色堂を含めて堂塔40、僧房約300、もの凄い規模で、全山お寺だらけだったんじゃないかと思うくらいの規模の伽藍が出来る。そしてそこには、恐らく500人から1000人位のお坊さんが住み暮らしていたんじゃないかと。何故かといえば、千僧供養といって千人の僧侶を中尊寺に集めて、法華経を唱えて天下の安泰を祈ったということですから、これはそのくらいの規模のお寺がそこに建てられたんだと思います。

■ 苦しみを取り除いて、楽しみを与える

それで1126年3月24日の落成式の時に清衡公が草案をしてお述べになられたであろうという「中尊寺建立供養願文」というものがこれは写本でございますけれども、重要文化財になって今日まで伝わっております。その中に清衡公が中尊寺をなぜ造るのかということが書いてあるわけですが、その第一番目は鎮護国家の道場として国と奥州の安泰を祈るとまず書かれているんです。これは鎮護国家、つまり争乱や災いを鎮めて国を護るというんです。その祈願の道場として中尊寺を建てる。だからあなたがたは攻めるんじゃないよ。ここは天下国家の安泰を祈る道場なのだから、弓矢を引いてはならないということを天下にまず宣言をしたんだと思います。

その次に言われたことは、これがとても有名な項で、多くの方に知られているところだと思うんですけれども、「二階建の鐘楼一字を建てる。甘鉤の洪鐘一口を懸ける」という項があるんです。その中に書かれていることは「抜苦与楽、普皆平等」というんです。平たく申しますと、全ての人々、奥州を始めとして日本に住んでい

る全ての人々の苦しみを取り除く、そして楽しみを与えたい。

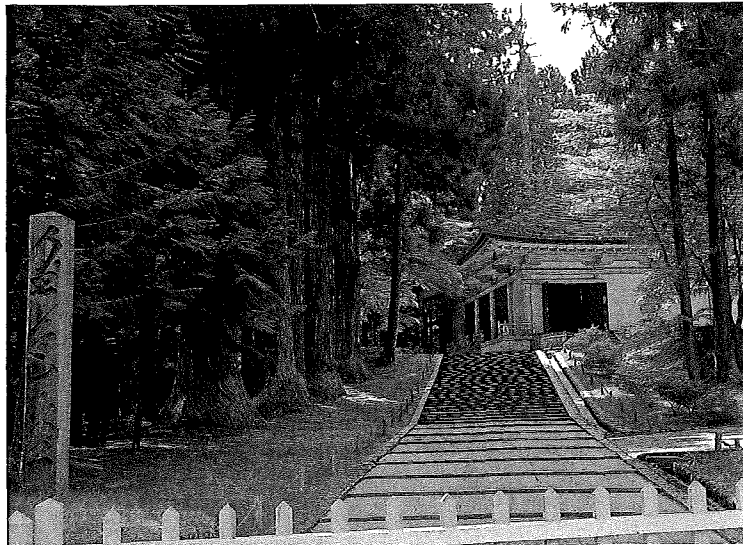
つまり、「抜苦」苦しみを取り除いて「与楽」楽しみを与える。それは普くみんなに平等にそれぞれが行き渡るようにしたい「普皆平等」ですね。

そしてその後、更にあることは前九年、後三年の合戦、そして奥州は坂上田村麻呂を始めとして攻められることが大変多かった訳であります。前九年、後三年の合戦等で故なくてこの地で命を亡くってしまった人達の迷っているであろう全ての靈魂を私は浄刹に運びます、というんですよ。鐘の音が大地を揺るがすごとに、人々の苦しみを取り除いて、楽しみを与えこの地で故なくして亡くなった人達の靈魂を敵味方もなく私は浄刹に運びます、浄土に連れて行きます、そうここでおっしゃる。私は、これは大変感動的な奥州人が誇りにすべき言葉だと思っております。みんなの苦しみを取り除きたい、みんなに平等に楽しみを与えたい。敵も味方もなく、ここで亡くなった者の迷っている靈魂を私はみんな浄土に連れて行きますというんです。

今日、世界中に無名戦士の墓とか戦没者を弔う碑とかいうものはたくさんあります。でも自分の命を奪いに来た敵で、この地で死を迎えているであろう靈魂を自分が極楽往生させてあげるんだと、そういうようにはっきりと言えるその信念の強さと申しますか、そういうことを言われた方はそういらっしゃるわけではないと思うんです。これが坊さんでなくて武将ですからね。尚、そこに私は決心の程が伺えると思っているわけです。

そして三番目には、仏教の教えを蒙ることによって、奥州人は蝦夷の人間と言って蔑んでいる都の人も我々も、みんな仏教の加護を受けるのであるからみんな平等だと。辺境地だと言われているここに我々は住んでいるけれども、なんにも変わらない、人として平等だと、そういう

ふうには清衡公は供養願文の中でお述べになられたわけです。これが中尊寺建立の精神です。この精神は初めに申しましたように、お釈迦様のご出家をされて何を誓願したのかというと、何にも変わることがない、仏教の心そのもの。それを清衡公は中尊寺建立の精神にしたんだと思います。そして、供養願文の中に示されますことは、戦いは放棄する、そして仏教、仏の加護をいただいて仏教という文化的な手法を持って、中尊寺を建立してこの地を平和に人々に幸福を与えたい。これが実は中尊寺建立の精神だと思っているわけでありまして。これをもう少し分かり易く申しますと、清衡公の考え方の基になったというのは、前にもちょっと触れましたけれども、自在坊蓮光から聞きたいいわゆる天台宗の教え、つまり法華経の教えであります。これがいわゆる清衡公に大きな影響を与えて中尊寺を開くことになるわけですね。それは



申しますと、法華経をご承知の方がいらっしゃると思うんですが、妙法蓮華経というお釈迦様のお説きになられたお経の中には、「一切衆生 悉有仏性 山川草木 悉皆成仏」ということがこの中に説かれているんですね。「一切衆生 悉有仏性」ということはどういう事かと申しますと、衆生というのは、我々人間だけでなくこの世に生きとし生けるもの全てです。命ある者全て、草も木も全て動物も鳥も魚も全部、一切の全ての命ある者はことごとく皆仏になる性質を持ってこの世に生まれてくる。これが「一切衆生 悉有仏性」です。この世に生まれてくる全ての命ある者は皆仏になる、仏になる性質を持って生まれてくる。そして必ずいつの時か仏になり、

悟りを開くというんです。このことが法華経の中に書かれている。「山川草木 悉皆成仏」同じことですね、必ず仏になるそのことを、法華経を学ぶことによって、清衡公は会得されたんだと。卑しい者も尊い者もない、この世に生まれてきた者はみんな平等に仏になる。この法華経の教えというものが、一人の武将である清衡公に大きな影響を与えたんだと私は思います。法華経というのは現在自分達がこの世の中にいる、今のこの我々の世界にいるものに対しての教えであります。自分達の身を修めて、家庭を整えて広く自分の周りの社会を利益と申しますけれども利益になるようにする、これが法華経に説

かれております。つまり鎮護国家、国を鎮めて安泰にする、国を護る、これは取りも直さず自分の生活が安泰になることでもあります。そして、浄仏国土、浄らかな仏様の国土にする、そのことが妙法蓮華経の中に説かれております。

そしてもう一つ分かり易い言葉を申しますと、法華経は28本、28の部分に分かれて書かれているのですが、その中の一番目の序本というところに「人中尊」という言葉が出てくるんです。これは、「一切衆生 悉有仏性」というように申しましたけれど、誰もが持っている仏になるという尊い性質を、自分を含めて全ての人に認める心をまず持ちましょう。そして他人を尊重して、お互いの存在を認め合って色々な人間が犯す過ちを許し合わなければならない。このことが自分達の住んでいる世界を浄土にしてそして自分達はそうして努力する。その結果、阿弥陀様が暮らしていらっしゃる極楽浄土に往生することができる。

「人中尊」という言葉にはそういう意味が含まれているんです。自分自身が尊い存在であると同時に、一人ひとりこの世の中に生まれてきている人みんなが、自分と同じように尊い存在であり、性質を持って生まれていることをまず認め合わなければならない。何の差別もないみんな平等に仏になるんだという、そのことをまず認め合わなければならないと言うんですね。

人間の存在というものは善心、悪心両方がごちゃごちゃになってあるんです。だから皆様方が強い倫理観を自分達の心の中に作らなければならない、ということをおっしゃられるのはその為なんです。なんか小悪いおじさんとかおばさんとかおねえさんには、やっぱり人間というのは弱いんです。そこに間違いが起こるわけです。そういう善心と悪心のある中で、犯してはならない間違いを人間は犯してしまうという、そういう存在である。だからお互いそういう過ちを許し合う。つまり寛容の精神を持つということが大切だというように法華経に述べられているわけです。

さて、この世の中を仏様のお住まいになられているような、浄らかな、いわゆる浄仏国土という仏様の国土にしようというのが清衡公の根本の考え方になったわけであります。

■浄仏国土と中尊寺・清衡公

それで浄土ということについて、お釈迦様もどのように述べられているのかと申しますと、お釈迦様がお説きになられた法門、八万四千の法門と申しますが、その中のいろいろなところで、浄土のことについてお述べになっておられます。浄土という言葉自体は、実は経典の中に出てこない。清浄国土という言葉は中国語に訳す時に、鳩摩羅什三蔵が、「浄土」という二字にお詰めになられたのだらうと言われております。その浄土の考え方というのは、お釈迦様が経典の中で説かれております。

まず浄土というのは、皆さんは一つだと思っ

ていると思います。たいがいの方は浄土というと、阿弥陀様がお住まいになられている西方極楽浄土、これが浄土だと。普通は皆さんそう思われていらっしゃると思うんです。

この浄土は、いわゆる我々の死後のこれから行って住む世界。これから我々が行く世界。そこにあるのが来世の浄土ですね。これは阿弥陀経や色々な経文の中に説かれていて、自分達が死後、来世に行って仏様に会うことが出来る世界、これが来世の浄土として一つ説かれている。つまり阿弥陀様には、西方極楽世界、極楽浄土がある。お釈迦様には、^{りょうぜんじょうど}靈山浄土という浄土がある。お薬師様には、^{るりこう}瑠璃光浄土という浄土がある。観音様には、^{ぶだらく}補陀落浄土という浄土がある。大日如来様に^{みつこん}密厳浄土という浄土があるというように、色々な経典に、それぞれの仏様がお住まいになっている、その世界を現わしている浄土がある。これがいわゆる来世の浄土です。

そしてその次にあるのは、清衡公が申しましたようにいわゆる浄仏国土です。これは成る浄土というんですね。つまり我々の住んでいる世界がそのまま仏様の住む浄土になる。自分達が一生懸命努力してこの世で仏道を実践修行して、そして自分達が仏様になろうという、つまり菩薩の仕事、努力をして自分達の住んでいる世界を浄土たらしめる、つまりこれが浄土国土、法華経の世界です。そして、成る浄土というんですね。

三つ目の浄土は、これはとても重要なのですが、^{じょうじやうこうど}浄寂光土というんです。在る浄土というんです。これは、仏はこの世の中のありとあらゆる処に遍満しているというんです。ですから皆様がこうしてお座りになっていらっしゃる自分の隣にも前にも後ろにも、頭の上にも足の下にも、どこにでも虚空に仏様は常に遍満しているというんです。ただ気が付かないだけだと言うんです。仏はあっちにあったり、こっちにあったり、どこにでもあるんだ。ただ、自分達がそれに気付いていないだけなんだと。そういうよ

うに、仏教では説きますので、信仰というものを通して、この世で触れてそして浸ることの出来る世界、これがいわゆる浄寂光土というふうに申すわけです。これは、清衡公というお方は、この世を法華経の教えに従って浄仏国土となるように中尊寺を建立して、そして浄土をここに現わしてその功德によって、来世は極楽浄土に往生したいと思って金色堂を建てたわけです。金色堂の説明をいたしますとそのことがよく判ると思うんですが、この中で金色堂にお参りされた方は結構たくさんいてくださるんじゃないかと思えますけれども、金色堂というお堂は阿弥陀堂です。あのお堂は、880年前に建立されて同じ場所に同じように建っています。違うのは、今コンクリートの覆い堂があるわけです。何にも変わっていません。その場所、寸分違わずあそこに建っております。そのままの姿です。何遍も何遍も修理して駄目になったらお堂を再生いたしておりますけれども、そのままの姿であそこにあります。これは、阿弥陀様の世界をここに現実に分かるようにしようということであのお堂を建てたんですね。

西方極楽世界というのは、金・銀・瑠璃・頗梨・磲磈・赤珠・瑪瑙の7つの宝物を以て建てられている。その一番最たるものは金ですから、この金でお堂を建てて、金色の仏様をそこに安置して、そして自分が死んだらそれを造った功德によって往生したいと言ったんです。

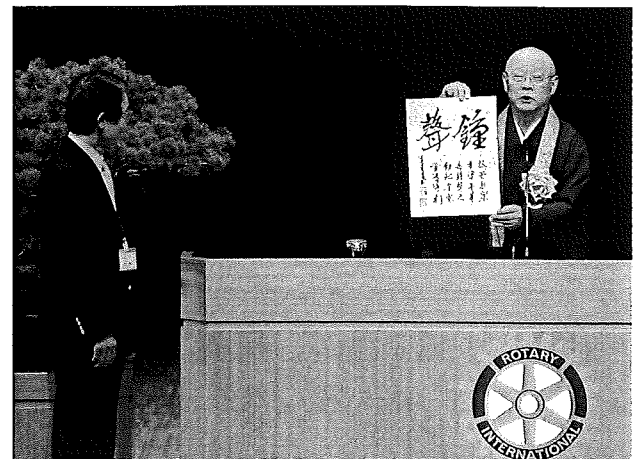
何故そう思ったのか。仏教の世界では、人間は六道、輪廻、転生といったでしょう。「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天」この六道をぐるぐる廻ってしまって、なかなかその苦しみの世界から抜け出すことが出来ないというわけです。

人を殺した者は、地獄に墮ちるんです。八大地獄に墮ちてまず救われるのはとても難しい。阿弥陀様のお力に頼って、観音様や勢至菩薩様のお力で何とか極楽往生するようにしてもらいたい。けどなかなかそれは叶いそうにもない。

自分も何人もの敵を殺して、そんな者が極楽

往生するのがとても大変だと思われて、その須弥壇の上に奉られたのが六地藏です。六地藏は、地獄へ墮ちるところの辻にいて、そして六道を遊化してどんな世界に墮ちる者でも極楽往生させるようにその手助けをすることが出来る仏様です。

ですから、あの須弥壇の上に阿弥陀三尊といって阿弥陀様には観音菩薩と勢至菩薩がそのお使いとして付いておりますので、その弥陀三尊の他に六地藏が安置されているのです。だから私はどんなことをしてでも一生懸命頑張りますから、臨終の際にはどうぞ極楽世界へ連れて行ってくださいという願いをもってあそこに浄土を再現したのが金色堂です。あの金色堂の中に、須弥壇の仏様の下には今でもちゃんと真ん中には清衡公、向かって左側に二代基衡公、右側に三代秀衡公、滅んだ時の泰衡公の首級が入っている。それが間違いなく今でも納まっております。ただ何年か前に、納めてある棺が老朽化してとてもそのままでは駄目になりますので、今



は新しい棺を作ってそこにご遺体を納め、それを須弥壇の下に今でもちゃんと納まっております。

金色堂というのは、浄土を再現した阿弥陀堂であると同時に、四代公を祀る墓所でもあるということをお心においていただけると有り難いのではないかなと思うわけです。

■自然の恵みに感謝し、真理を掘り所に

今、色々な事を申してまいりましたが、私はこれらのお釈迦様の教えや、あるいは法華経の教えやそれを基にして中尊寺を開かれた清衡公のお心、そういうものを考えてみますと、幾つかにまとめてみれば、まず一つ目は、この世の中に生きとし生ける者全て、それはまず自然の恵みの中にある。空気、水、太陽、大地そういった恵みの中にある。みんなが平等に享受できる。誰もが意識していないんだけど、みんなが平等に受けているこの自然の恵みがあって、我々はこの世の中に生きている。

そうでしょう。空気がなくては太陽が、水が、大地がなければ、人間は生きられないんじゃないですか。ですから、今自然と共生する、自然と共に生きよう、それは自然の中であってこそ、自分達の命がある。自分達はそういう自然に抱かれた中にある。かけがえのない人命を自分達は生きているということを、まず自覚するということが大切である。自然に生かされている。そういうことを思ってみる必要がある。

二つ目は、私達の命というのは、自分達の両親、父・母を一番の身近な縁として、この世の中に誕生するわけでありますが、30代遡れば、約10億7千万人になろうという直系の両親があるんです。これは一人欠けても、自分の存在はここにない。31代になったらその倍ですから、21億4千万人に近い直系の親がいるんです。しかも我々がこの世の中に生まれて来るためには、神様とか仏様の計らいがなければ、自分達はこの世の中に生まれてこられない。そのことを私達はちゃんと思わなければならない。つまり自分達の今ここにある、こうして息をしている我々の命というのは、自分だけの命だけでなく、神様や仏様や先祖や、数え切れない程の人達の命そのものが、自分達の命。その中には、神様も仏様も入っている。それほど大切な尊い命、それを私達はいただいてこの世の中で生きている。そのことをちゃんと理解しなければいけないと

いうことです。

三つ目は、人間というのは一人で生きられない。誰も彼も見も知らないような所の人や、もうわけの分からない程たくさんの人達の協力をいただいて、自分達は生きているんです。それはどなたでも判りますよね。

例えば、こうして立っておりますけれども、暑さや寒さを凌ぐ、洋服とか着物とかにしても、自然の恵みのものを原料にして、それを誰かが工夫して、糸にして、布にして、それを縫い上げて、ボタンを付けたりして、自分達がこういうふうに着られるものになって、それをどこかで買い求めているわけでしょう。何から何まで自分で作ってという人は、ちょっといらっしやらないというかーもしそういう方もいるかもしれませんが、だとすれば非常に貴重でございますけれども、一から十まで、衣・食・住の全てに渡って、自分達は他人の協力がなければ生きることが出来ません。そのことも私達は知らなければならない。

結論を申しますれば、我々は生きるということは、思い通りにならない。そういう人生を生きているんだと。みんなが苦しい、苦しい、そういう人生を生きているんだと。だからこそ、心を豊かにして、共に助け合って、お互いの為に生きなければならない。

自然の恵みに感謝して、自然と共生もしなければならない。そういうことを思ってみますと、我々はこの世の中に自分達があるということは、皆様がおっしゃる、いわゆる奉仕をしなければならない。他の命を生かすために、自分達がこの世の中に生まれてきている。

言葉を換えれば、自分達はそういう存在であるということに気付くことが、とても大切なだと私は思っております。

最後に皆様に私は是非お伝えしたい言葉がございます。これはお釈迦様が80歳の生涯をインド、クシナガラクシナガラの菩提樹の下で閉じられようとする時に、弟子達がお釈迦様に「まだ、死なな

いでください。お釈迦様が亡くなられた後、私達はどのようにしたらいいのでしょうか」と、問うのです。その時にお釈迦様は、言葉を残されるわけです。その中の幾つかを、皆様方にお伝えしたいと思います。これは「仏教聖典」という書物の中から選んだ言葉でございますので、皆様方の中でもご承知の方がいらっしゃるかもしれません。

お釈迦様は弟子から「まだ、死なないでください。もう少し長生きをしてください。何を頼りにしたらいいのでしょうか」と言われた時に、次のように答えるんですね。「各々自らを灯として、他を頼りとしてはならない」。そして「この教え、法を灯として拠り所とせよ。他の教えを拠り所としてはならない」と言うんです。つまり、真理を拠り所とせよと言うんです。これは「自灯明」—自らを灯明とする—「自灯明 法灯明」といって、私達仏教徒の間では、とても大切な言葉となっております。

そしてその次には、「教えの要は、心を修めることである。だから欲を押さえて己に克つことに努めなければならない。身を正し、心を正し、言葉を真あるものにしなければならない。貪ることを止め、怒りを無くして、悪を遠ざけ、常に無常を忘れてはならない」と言うんです。

その次に「もし心が邪悪に惹かれ、欲に囚われようとようとするならば、これを押さえなければならない。心に従わず、心の主になれ」と言うんです。これは皆さん、心のどこかにちゃんとインプットしておいていただかないといけない言葉です。

その次は、「心は人を仏にし、また畜生にもする。迷って鬼となり、悟って仏となるのも、皆この心の仕業である。だからよく心を正しくし、道に外れないように努めるがよい」。そして、最後のほうで残される言葉は、「この教えの下に相和し、相敬い、争いを起こしてはならない。水と土とのように和合せよ。水と油のように弾き合ってはならない」。そういうように言葉を残さ

れて釈尊は生涯を閉じられるわけです。今、法華経のことですか、お釈迦様のお言葉のことですか、色々とお伝えさせていただいてまいりましたが、皆様方がロータリアンとして、ご活動されているそのお心持ちも、今私が申し上げたことと、そんなに違っていることではないと、私は思っております。

皆様方がそれぞれの職業を通じて、その倫理観を高められて、そして共に協力し合って、世界の平和の為に、世の中の人々の為にお尽しになられているということは、何にも代え難い、素晴らしい大切なことだと、私は思っております。

立場は違いますが、私達ここに一堂に会している者が、同じ心になってこの世の中を美しく、そして幸せに充ちた国にしていかなければならないと思っております。

今、世界中で紛争・飢餓・難民・エネルギー・食料とありとあらゆるいろんな問題が起こって、日本の国、世界中がどの国もみんな不安を抱えながら生きている時代であります。そういう時代でありますればこそ、我々一人ひとりが襟を正して、この世の中にあって生きていかなければならないというように思っている次第であります。

どうぞ皆様方に今後ともたくさんの幸せがありますことを祈らせていただきたいと思います。

我々の願いが通じて一日も早く世界に平和と幸せが訪れますことを共に念願して修行し、奉仕活動に励み、頑張らせていただければと思っている次第であります。

今日は私にとりましても、大変素晴らしい有り難い一日になりました。皆様、本当に今日はありがとうございました。

以上をもちまして講演を終わらせていただきたいと思います。と存じます。

大変ありがとうございました。(拍手)